

2022年
2月号

喫茶

文芸

店

文芸

猫



今月のお題

喫茶店文芸 2022年2月号——目次

平田 ヘイデン

蟲中天 1

天野満

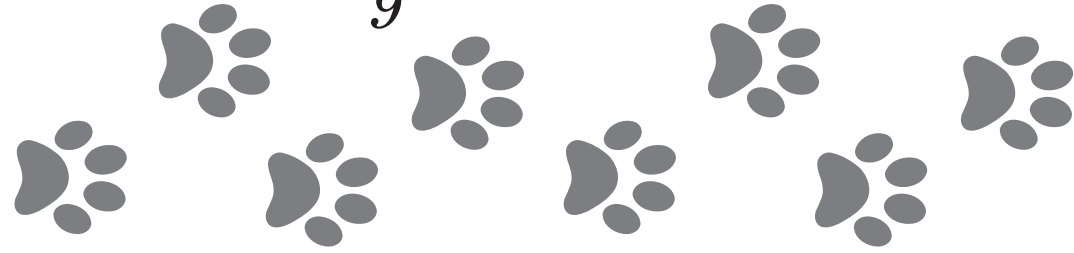
化けよ! 3

福原大輝

どこまでも高くなるビルと花の写真 9

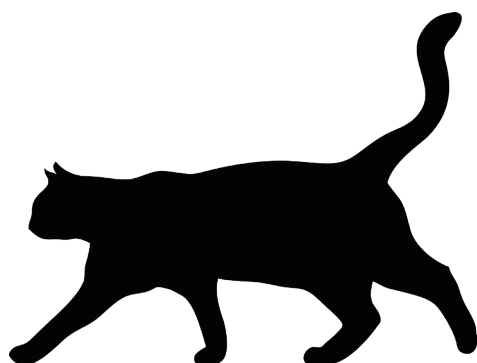
マサユキ・マサオ

数学猫の見つけ方 13



平田
ハイデン

虫中天



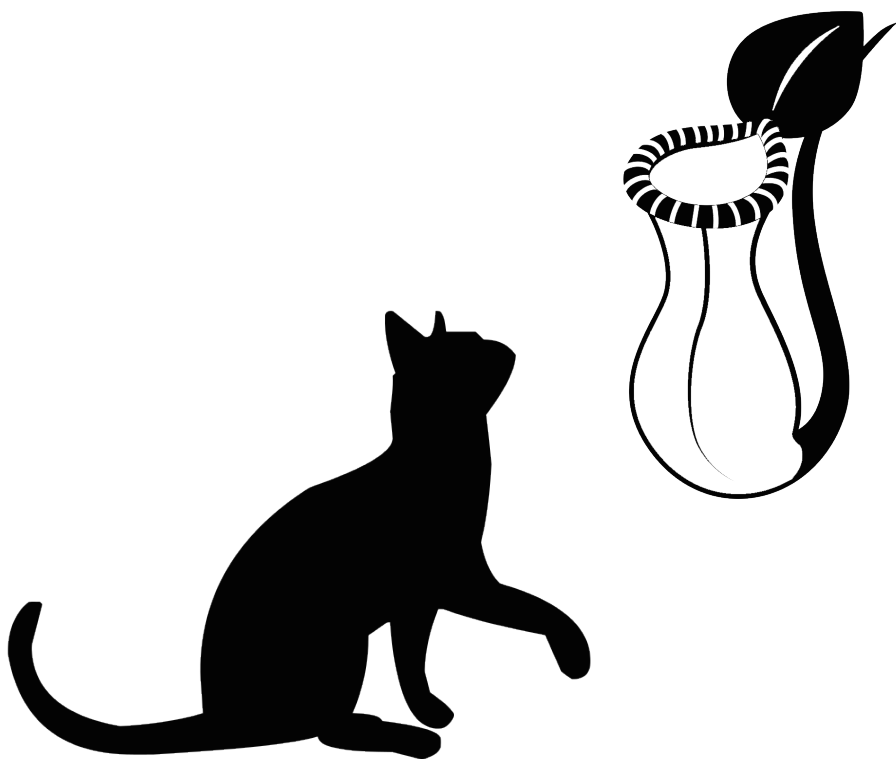
嫌いな上司を捕まえた。

夜の公園で、コンビニの袋をぶら下げたそいつと、帰宅中のわたしはばったり遭遇した。押し付けられた仕事をようやく終わらせて疲労困憊していた私は、買い物かごを持って行くのと同じ無感情さでそいつの袖を掴んで自宅に連れて行った。上司は日頃の態度とは打って変わって大人しく着いてきた。

上司を連れて入った浴室には、寝袋のような大きさのウツボカズラが浴槽に鎮座している。ゆるやかにくびれた壺型のボディが白熱電球の明かりをてらりと反射して艶めかしい。

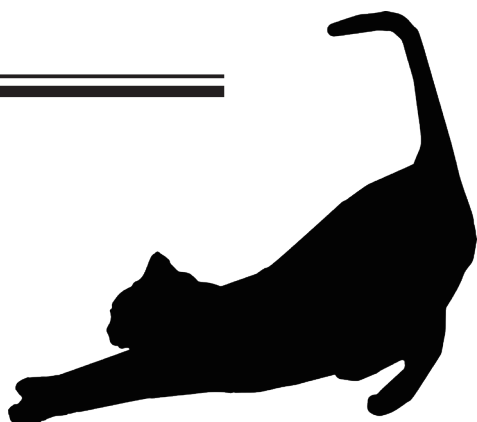
上司の腕を掴んでウツボカズラの前まで誘うと、上司は自ら進んでフタのような葉の隙間に足を入れ、もそりとその腹に収まった。

緩く空いた壺口の部分から中を覗き込むと、消化液の中で揺蕩う数多の顔の中に、穏やかな表情の上司の顔があった。



天野満

化けよ！



この漫画を読んだのは何回目だろう。展開もオチもわかりきっているはずなのに、何度読んでも面白い。

ここでいきなり問題です。展開もオチもわからないのにちっとも面白くないものな—んだ？

正解は「人生」です！

くたばれ。

とか、私が言ったら「人生は面白くするものだ！」とか自己啓発にかぶれたやつが言いやがるんだろ。ぶっ飛ばすぞ。

人生も漫画くらい面白ければいいのに。なんで私が人生を面白くしないといけないんだ。人生が私を面白くしやがれ。

百歩譲って面白くないのは良しとしよう。でも、せめて展開もオチくらいわかっつけ。

わからねえおかげで、私は引きこもりだよ。

山崎くんは学校の女子たちのアイドルだった。運動をして歓声、話をして歓声、勉強をして歓声……。

〈山崎くんに告白することなかれ〉

それが私の学校の女子たちの間で生まれた、学校のアイドル、山崎くんを巡る暗黙の掟。世界の平和に必要なのは愛でなく掟だ。相手を思いやる心より自分にも降りかかる損得を人間は大事にする。

でもおかしい人間もいる。損をすることを承知のうえで掟を破る者がいる。彼らはなにゆえ掟を破るのか。それは愛に狂ったからだ。

ならば私も愛に狂い掟を破ったおかしい人間ということにな

る。

放課後、校舎の裏に来てほしい。私はそう書いた手紙を、山崎くんの靴箱に入れておいた。

人けのない校舎裏で私は山崎くんを待った。恋する乙女の一世一代の大勝負。私の胸は張り裂けそうなほど激しく鼓動していた。が、日が暮れても、山崎くんが現れることはなかった。クラスが間抜けな鳴き声を上げながら、夕焼けの空を行くばかりであった。

当然のことだが、掟を破ったものには制裁が加えられる。

山崎くんを待っていた次の日、学校に登校すると、同学年の女子たちが私を指差して、コソコソ話していたり、指をさしたりした。どこから、情報が漏れたのか、私の手紙の一件は学年じゅうに広まっていた。ひどいものになると、わざと肩をぶつけてきたりする者もいた。

上履きと教科書は切り刻まれ、私の机には菊の花が入った花瓶が置かれていた。

それを見て笑うクラスメイト、笑うクラスメイト、笑うクラスメイトの群れ。

掟を破ったものには罰が与えられる。例えばそれがどんなにくだらない掟であっても。

でも、別にどうでもよかった。こうなることはわかっていながらも私はやったのだ。背徳者と笑いたければ笑えればいい。

「昨日さあ、下駄箱にこんなのが入ってたんだけど」

山崎くんが笑いながら、取り巻きの男子たちに見せていたのは私が山崎くんの靴箱に入れた手紙だった。

「放課後、校舎の裏に来てください、ね」

山崎くんは手紙をゴミ箱に捨てた。

「お前、昨日校舎裏行ったの？」

取り巻きの一人が山崎くんに訪ねた。

「行くわけねーじゃん、ダルいし。差し出し人も知らねーし」

やるわこれ、と山崎くんが取り巻きに手紙を渡した。いらねー

よ、と取り巻きが手紙をゴミ箱に捨てた。

その日を境に私は学校に行かなくなった。

山崎くんの一件があつてから、私は言葉を失った。言葉遊びではない。本当にというか、物理的に声が出せなくなった。

医者がいうには心因性のなにか、とか難しい説明をしていたが、要するに大きなショックを受けて体がおかしくなったということである。

私は間違つてない。

ただ、私の愛は社会——あの狭く苦しい学校——にとって都合が悪かったただけだ。

誰かを傷つけたわけじゃない。法律を破ったわけじゃない。ただ私は思ったことを言っただけだ。

証明しなくてはいけない。自分が間違えてなかったことを。じゃなけりゃ一生嘘つきとして自分の心を殺し続けなくてはいけない。そんなのは嫌だ。

でも、私の社会恐怖はひどく大きくなっていて、近所のコンビニ

ニに行くのさえも恐ろしい。

読み飽きた漫画が、誰かにもらったキツネのお面が、私に妙案を与えた。

人は見た目じゃないというが、あれはたぶん嘘だ。少なくとも私にとっては。

コンビニに行くことすら恐ろしかった私は今、夜の公園を一輪車に乗って走りまわっている。

これも狐面を使った変装のおかげに違いない。いつになくアクティブだった。鈴や巻物などの小道具を用意し、家の倉庫から一輪車を引っ張りだして乗り回すくらいに。

私は今、私ではない。玉藻だ。だからこうして外に出ているのは玉藻なのだ。私はみんなの嫌われものかもしれないけれど、玉藻はそうじゃない。

玉藻は今晚生まれたのだ。生まれたての人物を嫌いになる人は極めて珍しいだろう。少なくともこのあたりにはいないはずだ。多分。もっとも玉藻はまだ人にあつてはいないのだけだ。

薄暗い街灯の光に照らされたら、なんだか悪いことをしているような気がした。それが心地よかった。今の私に一番必要なものは悪徳だ。正確には悪徳、と社会が決めつけていることだ。

道の先に人影があった。全身を黒い服で包んでいて、金色の髪は肩より少し長い女の人だった。その人は私を見ると、ビクッと身体を震わせて一目散に逃げ出した。

変装すげえ。私は思った。今度、私を虐めたクラスのメスブタどもに同じことをしてやろうかな、村八分の御礼参りじゃこの野

郎、と、薄暗い悪徳の炎が胸の奥から湧き上がってきた。

が、燃え上がった炎はある考えによって急激に勢いを無くした。私は変装によって、なんの罪もない女の人に危害を加えてしまったのだ。たとえ驚かせただけとはいえ。それではあのクラスのマスブタどもと何も変わらないではないか。

私はパニックになってどうしようどうしよう、とオロオロオロオロして、一輪車を漕ぎ続けた。

するとさつき女の人がいいた通りに財布が落ちていた。あつ、これは反省するチャンスだ。この財布を女の人に届けて謝罪しよう。私はあのマスブタどもとは違う。悪いことをしたら反省して、ちゃんと謝ることが出来る人間だ。どうだ、人は見かけによらないだろうが。心だけは、心だけは、絹なんだよ。

私は急いで一輪車を漕ぎ続けた。しかし一向にさつきの女性は見当たらない。公衆トイレがあつたので、もしかしてそこに逃げ込んだのかな、と思い、女子トイレに入ってみたが個室は空だった。

なんてことだ。私は狐の面を被ったままマスブタの仲間入りを果たしてしまったのである。そうだよ、罪が簡単に許されるはずもない。そんな都合のいい話があるわけがない。罪人が街を闊歩していいはずがない。やはり私は家の中で息を押し殺して暮らしていくのが一番いい。

短い間だったけど玉藻として楽しい時間を過ごせたことだし、もう家に帰ろう。そう思った。

なるべく人目につかないようなルートを通った。誰かが私を見

てビックリしてはいけなから。

一輪車を漕いでいると、女の人飛び出してきて、私を見るや尻もちをついて恐怖に顔を凍てつかせた。

また私は悪事を重ねてしまったよ！

マスブタの中のマスブタに落ちぶれて、私は涙が出てきた。

せめて、危害を加えるつもりはないのだと言いたくて、両手を挙げて降参ポーズをとった。

でも、女の方は今にも失神せんばかりに怯えていた。

違う！ あなたは誤解している！

と、そこに先ほどの金髪の女性が現れたのである。

あああつ。どうしよ。怯えてへたり込む女性の誤解を解かなくては。でも、喋らずに誤解は解くのは困難か。じゃあ、それは後回しにして、せめて、財布を返さなくては。と思うや否や、遠くのほうでバトカーのサイレンが聞こえてきた。

やばい、私をこの金髪さんが通報したに違いない。早く謝らなくては。とか考えていたら、なぜか金髪さんは明後日の方向に走り出した。

私は全力で一輪車を漕いだ。金髪さんはなぜだか妙に足が早く、気を抜けば見失ってしまいかねなかった。

散々、チェイスした結果、公園の木に寄りかかってゼゼエと肩で息をする金髪さんに追いついた。

せめて財布、財布、財布返す、財布。

私は一輪車を降り、金髪さんのもとに近づいていった。金髪さんは私を見るや、また走り出した。

待って、と声を出そうとしたがやはり声が出ない。

が、金髪さんは足をもつれさせてと転んでしまった。私は急いで駆け寄る。許してくださいといわんばかりに、怯える金髪さんに私は財布を差し出した。

「それって」

金髪さんがいった。あれ、なんか声がダンディ？

「届けてくれたのか」

私は金髪のダンディボイスを聴きながら、何が何やらと頭がこんがらがってしまい、腕を組みながら無言でモジモジするしかなかった。

どういうわけだか私は金髪さん、もとい女装男とともに夜の公園のベンチに並んで座っていた。

「遠慮せずに飲んでね」

私は混乱していた。なぜ、この人は女装しているのだろう。そして、この缶コーヒー飲んでいいものだろうか。こっそり薬など盛られていてもおかしくない。パトカーのサイレンを聞くや走って逃げ出すような人物だから、やましいことをしてくる可能性もある。

「もしかして、缶コーヒー嫌い？」

私は女装男の眼を見た。よく見た。眼を見て嘘がわかるわけでもないが、とにかく見た。

「すみませんすみませんすみません」

どうやら本気で私、というか玉藻に恐れをなしているらしい。とはいえ顔を見られるのはなんだか嫌だったので、男に背を向け、

面をずらしコーヒーを飲んだ。

「セラヴィっていうの、よろしくね」

セラヴィ？ 何だそれは。どう見たって髪はカツラだし、メイクこそ濃いが外国人には到底見えない。

ああ、そうか。この人も玉藻と同じなのかもしれない。どういうわけだか、いつもと違う自分に変身して外に出ている悪徳仲間なのか。

〈玉藻〉

なんとなく作った小道具の巻物をセラヴィに見せた。

「——ギョクモ？」

ちーがーうー、と言いたかったがやはり声がでないので、セラヴィに顔を近づけてなんとか否定の意思を示してみた。

「すみません、たまも、で読み方あってるんですよね」

よしよし、伝わった。私は満足したので、今度こそ家に帰ることにした。

私は自転車を漕ぎながら一人物思いにふけていた。

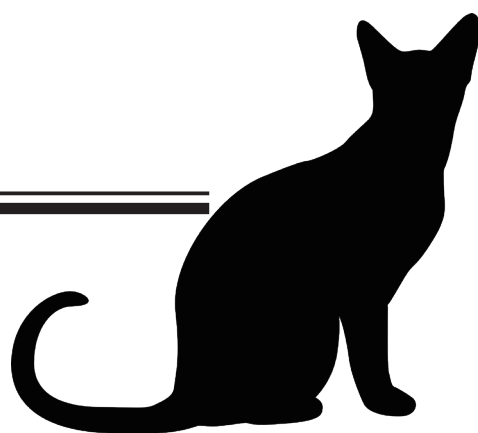
展開もオチもわからないのにちっとも面白くないものなーんだ？

正解は「人生」です！

今はその答えが間違っている気がした。そうだよ、人生が私を面白くすることもあるのかもしれない。たまには。(了)

福原大輝

どこまでも高くなるビルと
花の写真



私は部屋でパソコンに向かっていた。時折もじやもじやに伸びきった黒髪を掻いては、目の前に落ちてきた前髪を眼鏡の上に持ち上げた。室内は暑かった。激しくキーボードにキーを打ち込むが、汗が噴き出すだけで、それが何の意味もなさないように感じ私は立ち上がった。風呂に入っていない。相変わらず頭髪を掻き続け、頭を冷やそうと部屋を歩き回ると、壁にかけられているボードに気づいた。花の写真が飾られている。これは確か十年前に友達と行った植物園での写真だ。一面に赤やピンクの花畑があって、その中央に四人が映っていた。あの頃は将来のことは何も考えていなかった。今が楽しくて仕方なかった。友達といろんな場所に出かけていた。十年前なのに、なぜ私はそのことを鮮明に覚えているのだろうか。私の人生はあのときに終わってしまったのだろうか。このボードにもそのころの写真だけが飾られている。

強い日差しが差し込んでいる。私は窓の外を見た。その端には青空がのぞいていて、窓のほとんどは白い霧に包まれていた。その中に目を凝らすと巨大なビルがポツンポツンと浮かび上がる。それらは天を貫くかのようにそびえたっており、ビルというより塔に見える。そのビルのそれぞれが来る日も来る日も変わらずに上昇を続けていた。ビルの内部でどのようなことが行われているかは、私の知ったことでない。大工さんたちが中でせっせと働いているのかもしれないし、地中深くからすさまじい勢いで地盤が突き上げているのかもしれない。

かくいう私も、そのビルの中にいる彼らと全く同じように上昇を続けている。日々、彼らを追いかけたり追い抜いたりしていた。見下ろせば、きっとそこには網目状に高速道路が張り巡らされ

た大都市があるはずだった。しかし、高く上り詰めたこの場所からは地面を見つけることはできない。そこには溶岩が迫っていた。熱を発することで周囲に霧が巻いている。

私がキーボードの手を止めると、このビルの上昇は止まってしまふ。上昇が止まれば溶岩が私の足元まで迫り、私の身体を焼くだろう。だから休まず働き続けた。働き続けて生き残っているのは、数少ないビルの住人だけなのだろう。大都市の他の人々は亡くなってしまったのだろうか。

いくら手を止めずにいても溶岩は勢いを緩めることなく、私を脅かし続けた。私は一生このままかもしれない。諦めそうになることもあるが、私は身体が溶岩に溶かされそうになるその感覚になる前に、デスクに戻る。生存本能が体を突き動かしていた。

ふと身体が熱くなった。窓の外を見ていたその間にも溶岩は迫ってきており、衣装ダンスが溶け始め、机の脚が焦げ始めた。周囲のものが溶かされ、白い湯気を上げる。心臓の鼓動が激しくなり、足元の皮膚が焼かれるのを感じた。

私はいつものことだと頭髪を掻いた。もうやめてしまおうか。そんな思いが頭をかすめる。こんなことにおびえながら生活するのはもうこれっきりだ。

背の高いテールブル全体が黒くなり燃え始めた。熱気はみぞおちくらいに迫っているのだろう。

南無三……ふと見上げた瞳にボードが映った。

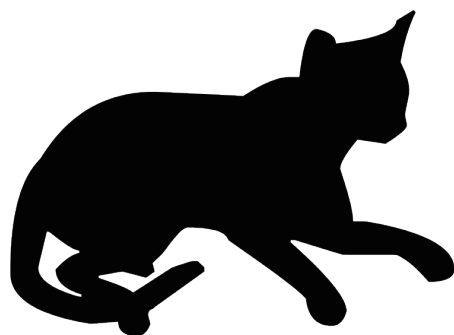
炎がボードに迫って、その端が焦げていく。花の写真が黒くなっていく……。

私は反射的にデスクに駆け出した。

もうすぐそこに溶岩が迫っている。休息もつかの間、私はデスクの椅子に飛び乗った。

マサユキ・マサオ

数学猫の 見つけ方



微分のグラフは猫が疾走した跡である。

積分によって出された面積が、猫の存在を証明している。

それを教えてくれたのは、高校時代お世話になった数学の先生だ。

当時僕は、理数系科目、特に数学で大変な思いをしていた。

そのくせ頑なに自分は理系だと押し通して、理系クラスを選択してしまっただ。

亡くなった父親が数学教師をしていたせいで、数学が得意だと勘違いしていたのだ。

文理クラスが分かれてから、理数科目は意味不明な記号の羅列にしか見えなくなった。おかげで僕は、毎度のように数学で赤点をとることになった。

猫田先生は、毎回追試の担当をしている数学の先生だった。

猫田というのは本当の名前ではない。

いつも授業の最初に黒板にチョークで猫の絵を描いた。

何なんですかそれ、と誰かが聞いた。

先生はふざけた様子でもなく「猫だよ」と答えるだけだった。

次第に、猫について聞く生徒は居なくなった。

猫田先生は、猫を描くことを覗けば、眼鏡をかけたありふれた中年男にしか見えなかった。

誰も何も聞かない。先生自身も語らない。

それでも、毎授業五分前に教室にやってきて、先生は黒板に猫を描く。

ある日、僕は猫田先生に呼び出された。

高校二年生の十二月初め、期末試験を一週間後に控えた金曜の放課後のことだった。

一学期の中間、期末、二学期の中間試験。僕は三回連続で数学の赤点をとっていた。

二十点、二十五点、三十点、もはやお馴染みになってしまった点数群。逆に、正解した問題すらどうやって解いたのか分からない。

僕にとって高校数学とは暗闇でジグソーパズルを解くような作業だった。

クラスメートは、悩みながらもパチパチとパーツを埋めてゆく。僕が四隅のパーツを見つけ出す間に、ほとんどの人は既に半分以上作業を進めている。

追試にやってくるメンツは、毎回ほぼ固定だった。

しかし、二年生になってから見慣れた女子生徒が一人やって来なくなった。

後日、その女子生徒は学校を辞めたことを知った。

辞めた理由までは分からなかった。

先生に呼び出された時、脳裏に浮かんだのがその女子生徒のことだった。

ついに留年の危機か。

留年になったとして、僕は学校に通い続けるだろうか。

留年は嫌だな、と頭では思う。

でも必死になって、人一倍頑張つてまで三年生になりたいのか。

自分でも分らない。

そんな薄ぼんやりした不安を胸に、僕は職員室の戸を叩いた。

僕が入室すると、猫田先生が無言で立ち上がり手招きをした。

職員室の中は石油ストーブで、むっとするような熱気が立ち込めていた。

手招きされた先の仕切り格子には「火の用心」のポスターが貼ってあり、僕と同じ年のアイドルが微笑みを浮かべていた。

急に恥ずかしくなり、職員室をぐるりと見渡した。

知っている先生も知らない先生も、僕たちに気付かないふりをしているのか、手元の採点用紙やキーボードに集中していた。

格子の反対側にソファがあり、そこに座るよう言われた。人目を避けられて少しほっとしたが、逆に何を言われるのだろうかという不安も高まる。

猫田先生は対面のソファに座り、僕に幾つか数学の公式を質問をして、紙に書かせた。

覚えていたはずの公式は、半分も思い出せなかった。

すると先生は、僕の答案用紙を裏返し何かボールペンで描き始めた。

先生が描いたのは、いつも授業前に描いている猫だった。

「あの、その猫って、何なんでしょうか」

「あらゆる数学の問題は、猫が解決してくれる」

数学猫、先生はそう言った。いつだって数学猫は数式の中に居る。気付かないだけで。

僕は紙面上の猫に、シャープペンシルの先でそつと触れようとした。

その瞬間、単なる落書きだった猫がジャンプするように逃げたのだ。

えっ、と声が出る。思わず先生の顔を見る。

「君はどうも数学猫に嫌われているようだ」

再びノートに視線を戻すと、猫は最初見た時のポーズでこちらを見て座っていた。

先生が猫の鼻先に魚の絵を描いた。すると猫の前脚がひよろりと動き、ぱつと魚に飛びついた。

「これから数学の問題を解く前に、猫の絵を描きなさい」

先生はそれから、手作りの例題集を僕に渡した。恐らくそれは期末試験の類似問題だった。僕は少しだけズルをしたような気分になったが、スクールバッグの奥に素早くそれをしまい込んだ。

先生は面談で猫のことしか口にしなかった。

しかし、例題集には期末試験で重要な要点が、出来るだけ少ない分量で解説されていた。

冊子の最後には一言「猫と仲良く」と書いてあった。

僕はその日帰宅してからノートに猫の絵を描いてみた。

先生の前でやってみたように、シャープペンの先を近づけてみる。

猫は動かなかった。さっき目の前で起きたことは幻だったんじゃないか。そんな気がしてくる。

それは別として、先生のくれた例題集は非常に役に立ち、二期の期末試験では赤点を回避することが出来た。

他にも僕の中で変わったことがある。毎週金曜日の放課後、猫

田先生に質問をしにいくようになったこと。

以前は、数学についてすべてがチンプンカンプンで何を聞けば良いのかすら分からなかった。

猫田先生は、授業とは別に追試常連の僕の為に、簡単な問題集を作ってくれていた。

今思えば、僕の為だけじゃないのだろうけれど、僕にとっては非常にありがたいことだった。

それともう一つ、猫田先生の授業で、黒板に描かれた猫がグラフィ上を走り回るようになったのだ。

あの日見た数学猫は、夢幻ではなかった。

しかし、それに気付いているのは先生と僕以外誰も居ない。

そして、数学猫の滑らかな疾走は、そこに示されるすべての事象を直感的に教えてくれた。

一旦分かってしまうと、何故今まで分からなかったのだろうと思う。自転車に乗れなかった子供が感覚を掴んだような、そんな気分だった。

三学期になると、僕はその感覚が馴染んできたように感じた。

そんなある日、僕は先生から教えられた通り、猫を描き、複雑な微分グラフに向き合った。

すると僕の軌跡とじゃれ合うように、猫が伸びをしたのだ。

僕は息を呑み、この機を逃すまいと書き込みを続けた。

猫は僕のペン先とシンクロし、試験問題の上を疾走した。

解き終えた時、僕は額の奥がじんじんするのを感じた。

猫がニャオン、と物欲しそうに甘えた声で鳴いた。僕が魚の絵を描くと、素早く飛びついた。そして一つあくびをすると、元

の静止した落書きに戻っていた。

僕は三学期後半には、数学だけは平均点以上とれる実力になっていた。

高校三年生になっても、猫田先生の元に聞きに行っていれば大丈夫だろうと僕は安心していた。

猫田先生が教師を辞めると聞いたのは、そんな矢先のことだった。

それは三学期の最後の数学の授業のことだった。

その日、先生はいつも通り授業の五分前にやってきた。しかし、いつもの猫を描かず、クラス全体をぐるりと見渡した。

皆、気怠そうな目で猫田先生に視線を集めた。

猫田先生は咳ばらいを一つして、今年度で教師を辞めて家業を継ぐことを淡々と伝えた。

父親が寺の住職をしていて、その跡を継がなければいけなくなったのだ、と。

僕にとっては全くの初耳で、思わず目を見開いて先生を表情を見た。

他の生徒は気の抜けた反応で、大きくざわめくこともなく、そのまま授業が開始した。

先生は結局、一度もチョークで猫を描くことが無かった。

「猫が家出をしてしまいましたので、今日で数学教師を辞めます」

先生は退任式で一言、それだけ言って壇上を降りた。

失笑するような声がそこから聞こえた。

僕は一人、唇を噛みしめて、その後姿を見つめた。

「数学猫が居なくても、教師を続けることは出来るんじゃないですか？」

退任式の後、僕は去っていく猫田先生を呼び止めて尋ねた。

先生は俯いて、少しはにかむように微笑んだ。

それでも、私には必要だから。先生は口ごもるように言った。

数学の問題を正しく解くことと、数学の世界には隔たりがあるのかもしれない。数学の世界を知らない僕には分からないことだった。

冬休み以降、自分の思う様に数学猫が動かなくなってしまったこと、まったく猫が動いてくれない日があることを、ぽつりぽつりと僕に語った。

僕に数学猫のことを教えたせいかもしれない。根拠の無い罪悪感がこみ上げてきたが、恐ろしくて口に出来なかった。

「何故、僕に猫の話をしたんですか」

ずっと聞きたかったことだった。先生は口数が少なく、数学以外のことで自分から何かを語ることにはなかった。

「数学猫を見つけたのは、君のお父さんだったんだよ」

大学で僕の父と共に、数学科に所属していたこと。数学で苦労している僕をずっと気にかけてくれたこと。生徒個人を特別扱いしたくなかったこと。そんなことを、最後の最後になってやっと教えてくれた。

どうやって父が数学猫を見つけたのか。父はどのように猫田先

生に数学猫の存在を示したのか。数学猫とは結局何なのか。

気になることが山ほどあった。聞くべきことは沢山あるのに、僕は何も聞けなかった。

「今まで、ありがとうございます」

「君も、今まで通り猫と仲良くしなさい」

それが猫田先生の最後の言葉だった。

高校卒業以来、僕は猫田先生と会っていない。

十年以上経った今、数学の問題を解く機会は無くなった。

戯れにノートに猫の絵を描いても、それがシャープペンシルの先を走り回ることではない。

微積分、ベクトル、指数関数のグラフを書いてみても、数学猫は現れない。

大学受験まで、くると戯れていた猫はまるで心を閉ざしてしまったようだった。

数学猫は猫田先生の元に戻ったのだろうか。

猫田先生は、数学者にも数学教師にもならなかった僕に、数学猫の秘密を教えるべきだったのだろうか。

それを思うと、未だにやりきれない気持ちがかみ上げてくる。

同時に、あの現象がやはり夢幻だったようにも思えてくる。

しかし、数学猫の存在を忘れていたある日のこと、書店の科学雑誌をめくっていてこんなことが書いてあるのを見つけたのだ。

「猫が数式を駆け巡って、僕を解決に導いてくれるんだ」

とある海外の若い数学者の言葉だった。今までにない新しい素数分野を開拓したホープ、雑誌にはそう書いてあった。

そうか、やっぱり数学猫は存在したのだ。
いつだってどこだって、気付かないだけで猫は数式と戯れていたのだ。

そして、自分を発見してくれる目を持った誰かを待ち続けている。

喫茶店文芸 2022年2月号

監修：マサユキ・マサオ

編集：氷川省吾

HP url : literarycafe.wp.xdomain.jp/

